

探訪 北の風景 ④

タウシュベツ川橋梁 十勝管内上士幌町糠平

青木和弘

十勝管内上士幌町の糠平湖にあるコンクリート製のアーチ橋、タウシュベツ川橋梁は、「幻の橋」とも呼ばれる。

1937年に国鉄士幌線に完成したが、1955（昭和30）年8月1日、発電を目的にした糠平湖建設のため、清水谷駅〜糠平駅〜幌加駅のルートが変更になり、タウシュベツ川橋梁を通る旧線が廃止された。橋梁上の線路は撤去されたが、橋梁自体は湖の中に残され、現在までその姿をとめている。

糠平湖は人造湖で、季節や発電で水位が変化するため、橋梁全体が水没してしまう時期もあれば、

水位が低くなって橋梁全体が見渡せる時期もある。2001（平成13）年、旧国鉄士幌線コンクリートアーチ橋梁群」が第1回北海道遺産に選定されている。糠平に鉄道記念館があり、士幌線の説明資料やほかの橋梁の情報を見ることが出来る。

タウシュベツ川橋梁は、例年だと、7月中旬からダム湖の水位が上がり、かなりの部分が水没するのだが、今年はまだ全容を見ることができた。ダム湖の水位は3月から5月はほぼゼロになり、湖底には切り倒された大きな切り株を見ることが出来る。

雪解けの進む5月ごろから水位が上昇し、アーチが水面に映る眼鏡橋を見ることが出来る。6月から9月には7割〜9割が水に覆われ、大雨が降ると完全に水没するようになる。5月〜6月ごろ、雪解け水が流入するため、徐々に水位を上げ、橋梁の下半分が水に覆われる。

水が張る12月〜3月は、発電用に水を抜くので水位が下がり続け、水の下から橋梁が現れるようになる。

タウシュベツ川橋梁の見学には3つの方法がある。一つ目は、国道273号沿いに駐車スペースがあり、200メートルほど野鳥のさえずる森の中を歩くと、展望台がある。橋梁までは、ちょっと遠いが、湖の全容を見渡すことができる。



雪に埋もれた冬のタウシュベツ川橋梁

二つ目は、NPO法人ひがし大雪自然ガイドセンターの有料ツアーを利用して橋の近くまで行く方法だ。湖底が出ている時期はすぐそばまで行ける。

三つ目は、十勝西部森林管理所東大雪支署の許可を得て、国道273号から林道を経由していく方法だ。2009年から糠平三股林道の当該部分は許可を得た車以外は車での通行が禁止されている。徒歩での通行はできるが、ヒグマが生息しているので、ヒグマ対策が必要。観光にはお薦めできない。

糠平で欠かすことができないのが「ぬかびら源泉郷」だ。現在、9軒ある温泉宿ぜんぶが源泉掛け流しの良質な湯を提供することで温泉ファンに知られている。客室数は9軒全部で160室、定





タウシュベツ展望台からの眺望

員550人だ。

温泉は、1919（大正8）年、湯元館の創業者・島隆美さんが、原生林の中に発見。その後、道路が整備され、1934（昭和9）年には、15軒の宿が軒を並べ、湯治場としてにぎわった。現在、ぬかびら源泉郷旅館組合では温泉街を森に復元しようという運動を柱に、新しい時代の「癒やし」の温泉地づくりに取り組んでいる。ちなみに、この地域の温泉は、透明で肌当たりの柔らかな優しい湯だ。

士幌線は、根室本線の帯広駅から分岐した地方交通線で、当初の計画は、上川管内上川町で石北本線に接続する計画だったが、1939（昭和14）年開業の十勝三股（とかちみつまた）までで建設

は終わった。その後、1987年、3月23日、士幌線は全線が惜しまれて廃止になった。

糠平は現在も、東大雪の秀峰ニベツ山（標高2013メートル）の登山拠点として登山愛好者には、よく知られている。



士幌線があった当時の登山客でにぎわった糠平駅（1984年）